

フィールドワーク in 神楽坂

ルートガイド

こうよう会千葉県支部 20251122

関 陽児

(東京理科大学教養教育研究院野田キャンパス教養部・理学研究科科学教育専攻)

<はじめに>

ご挨拶： 本日はこうよう会千葉県支部様主催の行事にお招きいただきましてたいへんありがとうございます。本日は「フィールドワーク in 神楽坂」と題しまして、応用地学・地学教育を専門とする関が神楽坂周辺の地形・地質・土地開発・歴史等について、みなさまにご案内をいたします。

実は、関は学内での授業や普及活動等の機会を通じて、神楽坂周辺での地学散歩のコースを東西南北いくつかご提供させて頂いております。その中で、本日ご案内するコースは地形の多様性、江戸期の土地の人口改変、都市の営みとその変容等さまざまな点でたいへん面白いコースです。ご参加の皆様にお楽しみいただけますと幸いです。



＜巡査の対象地域＞

巡査するコースは、都心の鉄道の有力な結節点である飯田橋駅前の神楽坂とその南側の一帯です。関東平野のど真ん中、青梅を頂点とする多摩川が造った巨大な扇状地である武蔵野台地の東の端近くに当り、「台地」（山の手）に「低地」（下町）が入り込んだ起伏に富む地形の地域になります。

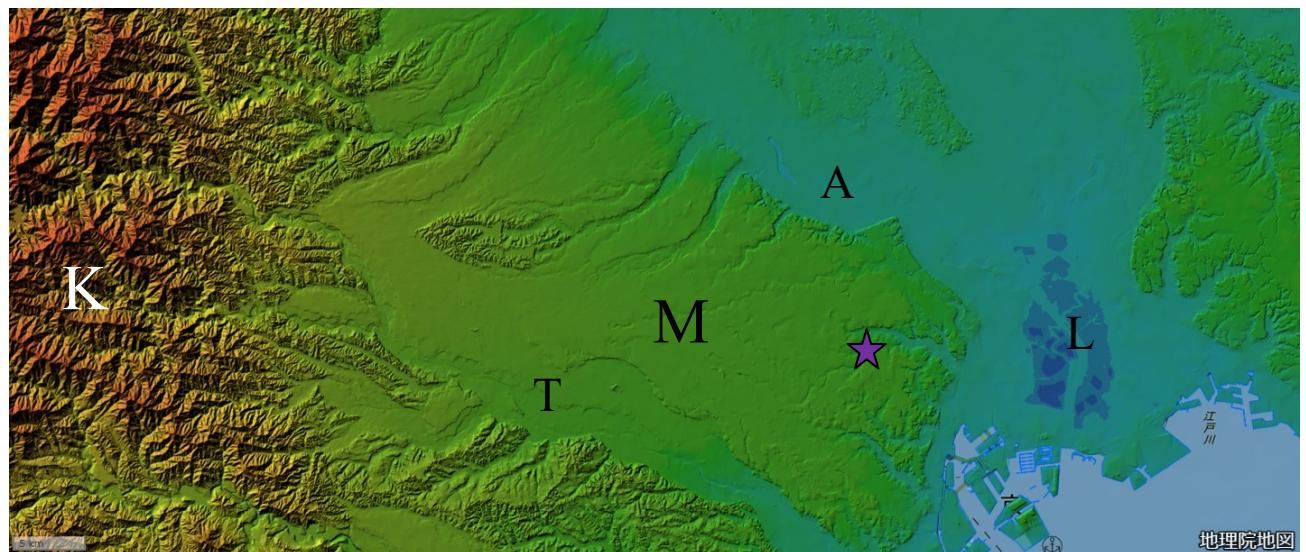
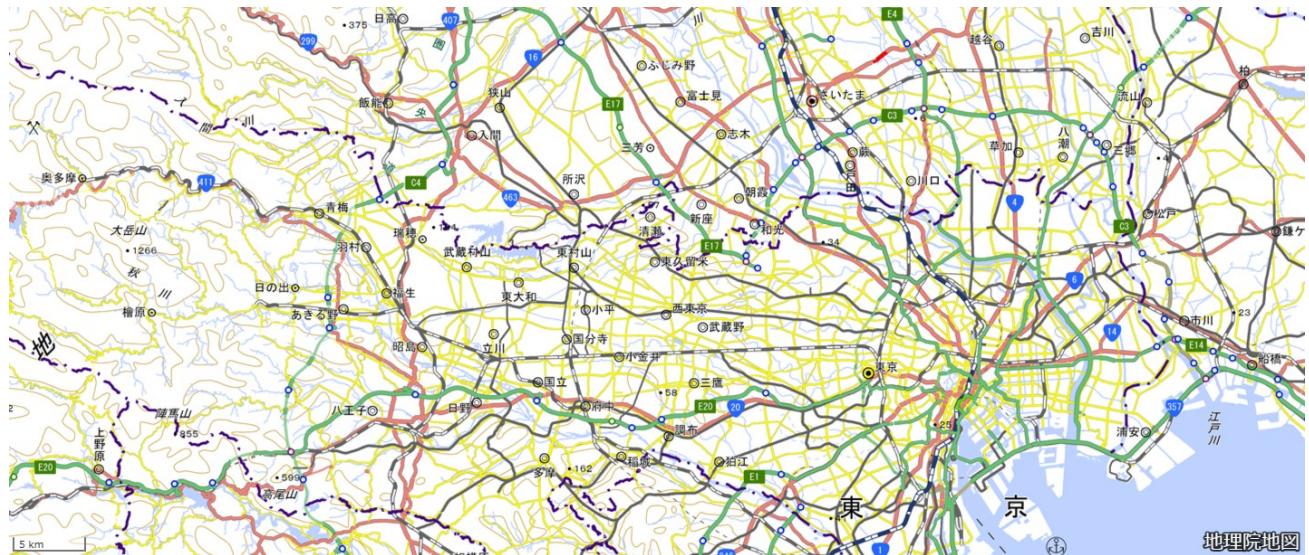


図1 武藏野台地とその周辺の地勢図（上）と地形図（下）（同一の範囲を示しています）

地形図上の記号…K：関東山地、M：武藏野台地、T：多摩川、A：荒川、L：東京東部低地帯、★：神楽坂

<巡検コースのあらまし>

東京理科大学神楽坂キャンパスの数学体験館前から出発しましょう。市谷船河原町からアンスティチュ・フランセ前を曲がると急坂の登り口で、坂上には①最高裁長官公邸の大邸宅があります。外堀通りに沿ってしばらく歩き、新見附橋を千代田区側に渡ります。「東京市外濠公園」の銘柱が建つ②外濠公園に入り、外濠の地形・土木・水理・生物等を眺めながら10分ほど歩きましょう。市ヶ谷フィッシュセンターまで来たら③市ヶ谷見附の橋で再び新宿区側に戻ります。大通りを渡ると見上げるような階段の④亀ヶ岡八幡が現れます。市ヶ谷総鎮守様の斜面を見学したら旧紅葉川の河道沿いの路地を進みましょう。ほどなく⑤防衛省本省の正面玄関前、総合通信塔の威容が圧倒的です。再び路地を進み、地域のお宮である樹叢（ますみの）神社のかわいらしさ境内を抜けると、新宿歴史博物館の案内板がある津の守（かみ）坂です。この坂道の西側に位置する⑥荒木町の窪地は「都内隨一のスリバチ」で、地形好きの間で有名です。津の守坂の坂道を登り切ると⑦甲州街道です。この付近の甲州街道は左右どちらに離れてても下り坂になります。武藏野台地上の幅の狭い尾根沿いに造られていることが分かります。甲州街道を渡った南側が、旧赤坂川に沿う⑧旧鮫河橋（さめがばし）谷町です。江戸期には伊賀者の大縄地（集団拝領地）でした。谷の両側が崖になっており、谷を挟む台地上にはアニメの「聖地」である須賀神社を始めとする寺社が並び立っています。鮫河橋谷町の谷地を下りきると赤坂御用地仙洞御所への入口です。鮫河橋坂を四ツ谷駅方向に登ると⑨迎賓館赤坂離宮の西門で、お向かいは学習院初等科です。最後に四ツ谷駅に隣接する⑩四谷見附の一帯を見学して神楽坂南部巡検を終了します。

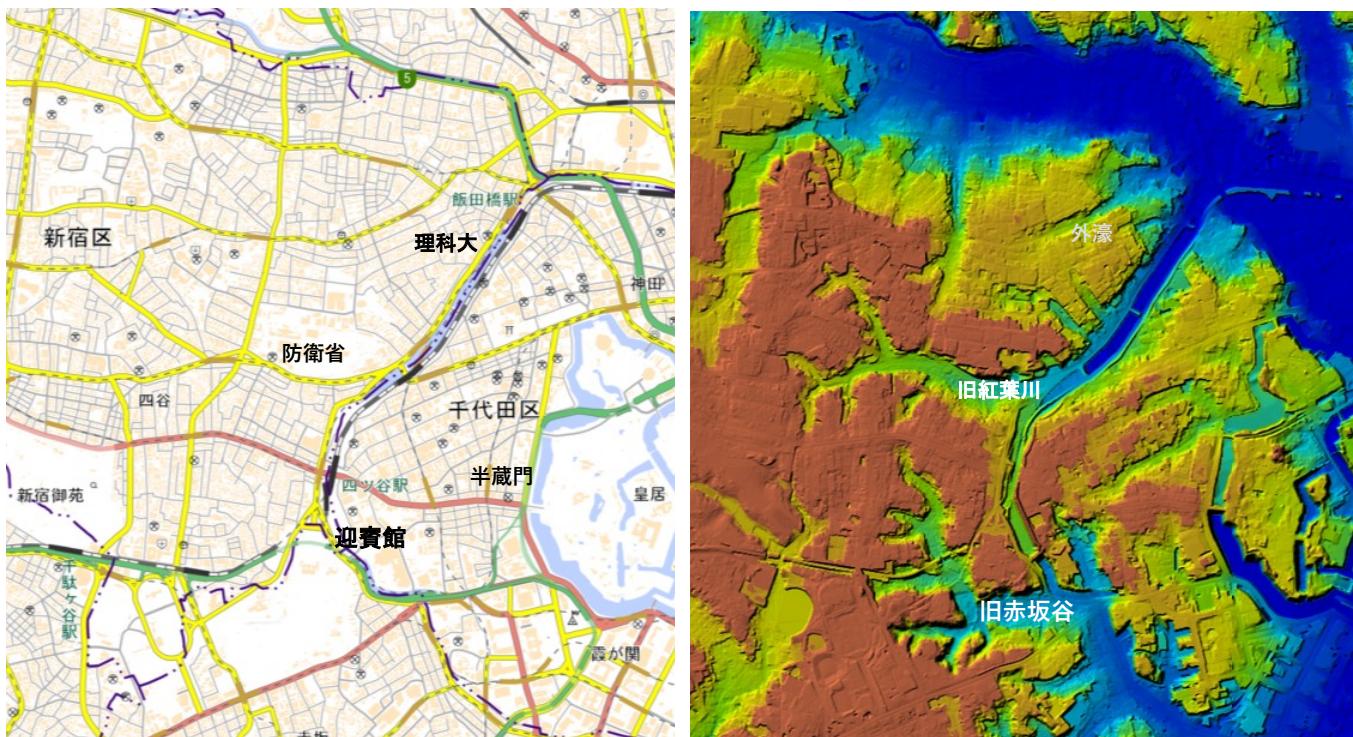


図2 巡検コース周辺の地勢図（左）と地形図（右）
各図の横幅は約4 km。地形図の標高は青色（5 m以下）から赤茶色（30 m以上）まで5 m間隔

内濠

<見学地点の説明>

巡検での見学地点①～⑩の位置と、予定のルートを図3に示します。コースの全長は5km弱です。台地と低地にまたがったコースなので、他の神楽坂巡検と同様、今回も標高差15m前後の起伏を何回か上り下りします（図4）。コースの前半では江戸城外濠を縫うように、中盤では台地上を、そして終盤では台地を侵食している谷の中を進んでいきます。それぞれのエリアで、地形・水の動き・水質・人間の営みとの関連・歴史的変遷などさまざまな視点から眺めていきましょう。

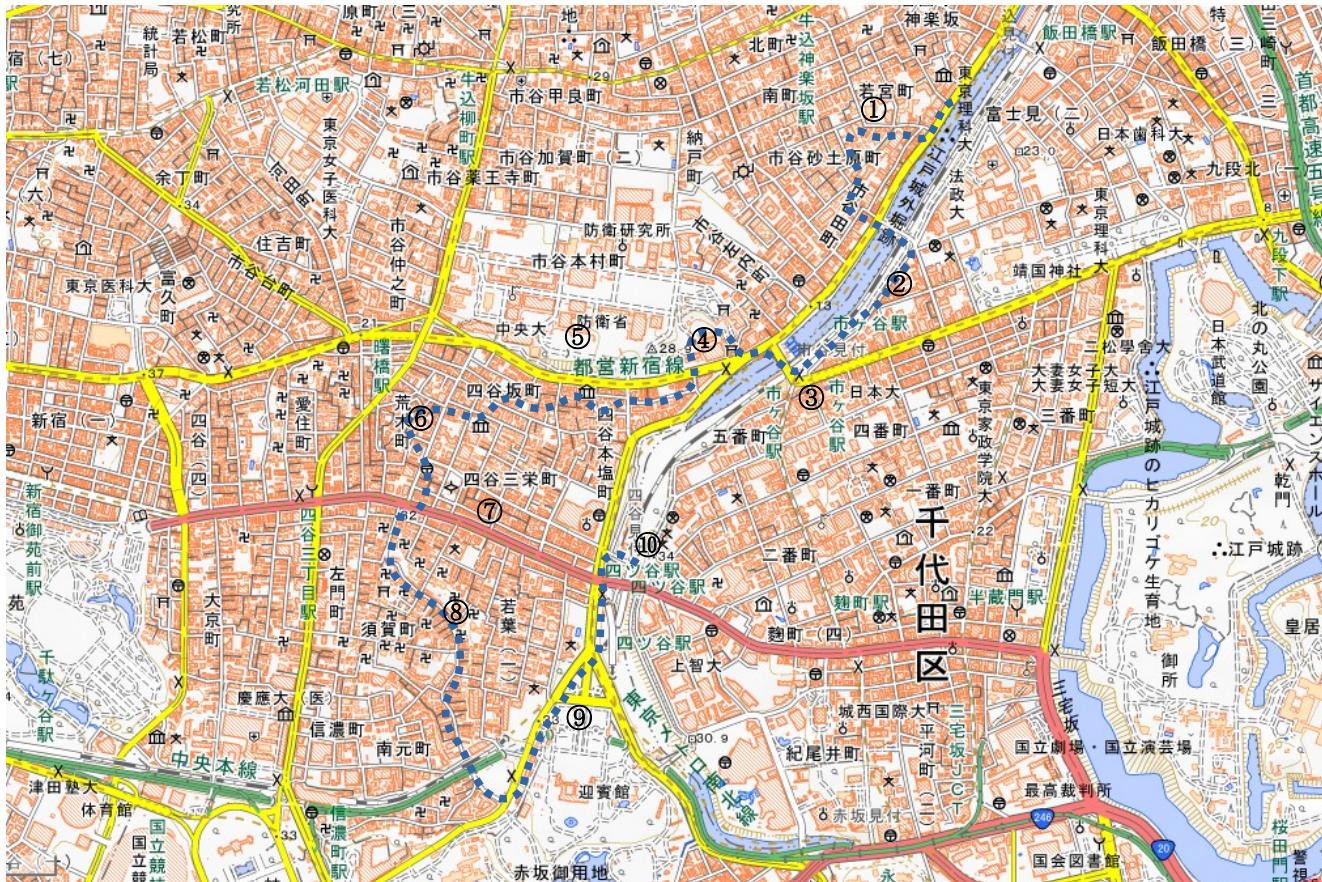


図3 巡検コースと見学予定地点（図の横幅は約4km）

- ①：最高裁判所長官公邸、②：外濠公園、③：市ヶ谷見附、④：市ヶ谷亀ヶ岡八幡宮、⑤：防衛省本省、
- ⑥：荒木町、⑦：甲州街道、⑧：旧鮫河橋谷町、⑨：迎賓館赤坂離宮、⑩：四谷見附、——：予定コース

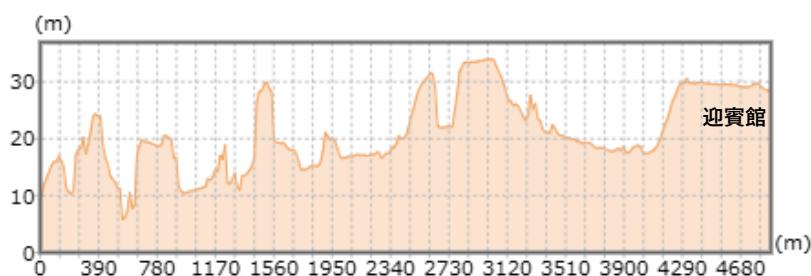


図4 巡検コースの起伏（縦軸が標高、横軸が出発地点からの距離）

見学予定地点①：最高裁判所長官公邸

理科大の神楽坂キャンパスを出発して外堀通り沿いに150m程歩いたところの給油所を右に曲がると、かなり急な坂道が現れます。坂の名前や由来を記した案内板も立っています。この辺り一帯は、外濠から逸れる方向には、どこを歩いていても坂を上ることになりますが、こちらの坂道＝逢坂は、特に勾配がきつい部類に入ります。登り口には坂の名前の説明板と防災井戸が置かれています。

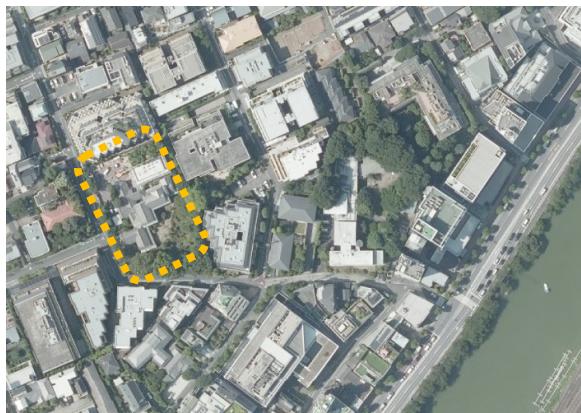


図5 最高裁長官公邸（――）付近の航空写真（左、国土地理院）とお屋敷（右：文化遺産オンライン）

坂の入り口付近は、右手が「フランス文化センター」、左手が理科大の校舎です。坂道が急なだけではなく、坂道に面した住宅地の石垣も大きな傾斜と高さをもっています。江戸期に造られたと思われる石垣も少なくありません。旧坂を登り終える辺りからは、入口に警察官の詰め所がある大きな屋敷が広がります。この御屋敷が「三権の長」の一人、最高裁判所長官の公邸です。職名を示すものは何もないのが意外です。

見学予定地点②：外濠公園

日本最大の城郭である江戸城の外郭をなす堀が外濠です。おおよそ4km四方の江戸城総構えと城下を画する長大な水路で、何段階にもわたって行われた江戸城建設の総仕上げとして、多くの大名に分担させて建設されました。外濠の南東側は、東京大空襲や戦後の高度成長期などに埋め立てられてしまい、「呉服橋」「京橋」「鍛冶橋」「溜池」などの地名から、かつての堀の位置を想像するしかありません。それに対して、北西側では今でも水路や地形が残されています。特に往時の様子がよく保存されている飯田橋駅から四ツ谷駅までの間は、貴重な歴史的遺構として国から史跡として指定されています。その部分は、地形的には武蔵野台地の高所を開削して築造された区間とほぼ重なります。台地を掘り込んで造られているので、長く大きな土手と所々に現れる土橋が特有の景観を見せています。四ツ谷駅付近を除いてお濠には水も湛えられていますが、お世辞にも綺麗とは言えません。外濠の水を綺麗にしようという検討が長年続けられてきましたが、いよいよその事業が始まります。是非、気持ちよくボートが漕げる外濠の水を見てみたいものです。

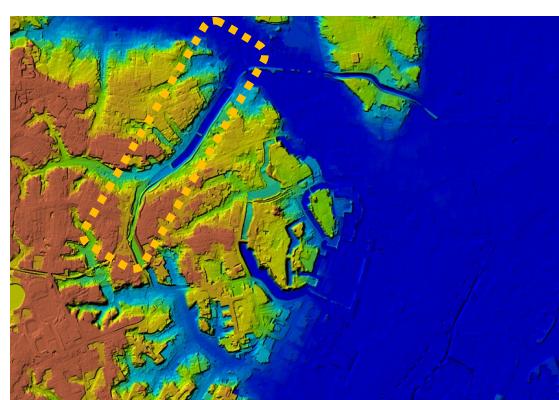


図6 江戸城の外郭と内郭（左：城びと）および江戸城の総構えの地形図（右：国土地理院）
オレンジ点線が現在の外濠公園の領域

見学予定地点③：市ヶ谷見附

市ヶ谷見附は、北隣の牛込御門、南隣の四谷御門に間に位置する市ヶ谷御門の「見附」=監視所になります。これら外濠の御門は江戸城外郭と江戸市中との交通の監視と危急時遮断のための施設です。牛込御門=JR飯田橋駅も、市ヶ谷御門=JR市ヶ谷駅も、外濠を跨ぐ橋はお城側（東側）が高い坂道になっています。これは、この付近の外濠が、武蔵野台地を侵食した谷である旧紅葉川の谷を足掛かりとして造られたためです。もともとの谷筋が外濠になっているのでその外側（西側）もまた上り坂になり、市ヶ谷台へと登っていきます。外濠を軸として、その両側に高くなる特徴とともに、もうひとつの大きな地形上の特徴があります。紅葉川の谷を遡る方に向かい、標高が徐々に高くなるのです。このような土地の高低に合わせて外濠の水面の高さも調整する必要が生じます。飯田橋駅→市ヶ谷駅→四ツ谷駅の順にJRの線路は上り坂が続きます。また、市ヶ谷御門よりも南西側は旧紅葉川の谷筋からも離れて、武蔵野台地の高台をもろに掘削して外濠が造られています。外濠は「濠」という防衛施設なので、その水は静かな水面と一定の水深をもつ必要があります。そのためには、濠の「底」が地形と同様の連続した斜面であってはならず（浅くて速い流れになってしまふから）、段階的に高さが変わる階段のような構造になっている必要があります。その「水理」を作るための施設が「土橋」です。各御門の内外を連絡する道路の「土橋」とは、土を締め固めて作ったダムです。そのダムが四谷方から流入する濠の水を段階的に堰き止めて「静かで深い」水域を作っているのです。

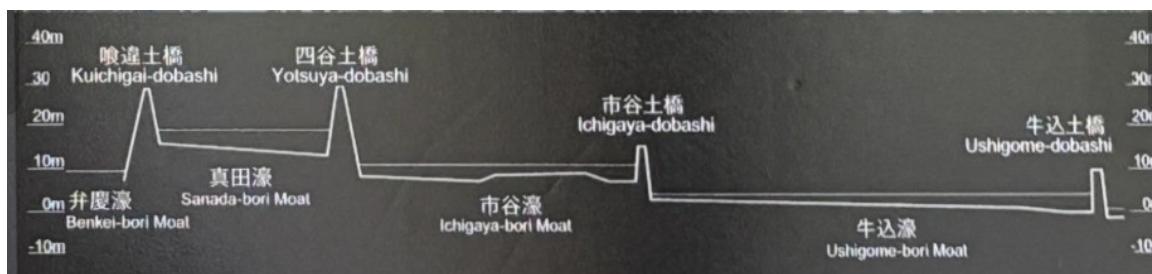


図7 江戸城外濠の縦断面=延長方向の断面図…牛込土濠から四谷濠に向けて順次水面が高くなる

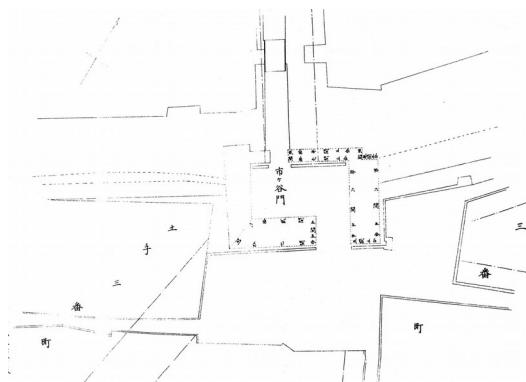


図8 撤去以前の市ヶ谷御門（左：東京都）と現在の市ヶ谷御門（右：千代田区観光協会）



図9 市ヶ谷御門の土橋（左）と四谷方（右側）に登り勾配となっているJR市ヶ谷駅ホーム（右）

市ヶ谷御門に向かう市ヶ谷橋の隣には、並行して古めかしい橋が架かっています。これは昭和初期に造られ戦災を生き延びた現役の水道管の橋＝水管橋で、正式には「市ヶ谷見附跨線水管橋」と呼ぶそうです。長さはほぼ100 m、「日本の近代土木遺産」に指定されている貴重な構造物です。

見学予定地点④：亀ヶ岡八幡

市ヶ谷御門の下の大通りを渡るとすぐに、ビルの合間に市ヶ谷亀ヶ岡八幡の見上げるような石段が構えています。15世紀に太田道灌が勧請した八幡様は、元は市ヶ谷御門に隣接していたものが寛永年間に当地に移築され、大層な賑わいだったようです。それにもしても、急な石段です。有力な神社にはときとして急な石段がありますが、なぜなのでしょうか？ 鉄筋コンクリートや斜面の保護工法が存在しなかった江戸時代、高低差のある土地が接している場合、その接続部分の斜面の傾斜を緩くすることはあっても、急にするのは考えにくいことです。つまり、古い神社にときどき見られる急な石段は、台地が落ち込む斜面の自然の傾斜を利用して、そこに石を積んで造られた可能性が高いと言えます。急な石段部分の傾斜を緩くすることを考えてみましょう。急斜面の上に向かって道を掘り下げていけば、坂が緩くなります。すると、掘り下げた部分の左右には崖が現れます。つまり「切通し」です。都心の坂道には、このようにして造られた切通しが多く見られます。

見学予定地点⑤：防衛省本省

防衛省本省が置かれている市ヶ谷台は、まことに数奇な歴史の舞台を経てきました。この地は、徳川御三家のひとつ尾張徳川家の藩邸でした。台地上の広大な敷地は、市ヶ谷御門を挟んで江戸城西側に陣取る重要な拠点です。幕末、新政府軍の江戸進軍に際して、西郷隆盛と勝海舟との談判で江戸城無血開城が実現した話は有名ですが、まさにその局面で、この市ヶ谷尾張藩邸にも江戸城総攻撃の構えを取る新政府軍が陣取っていたわけです。

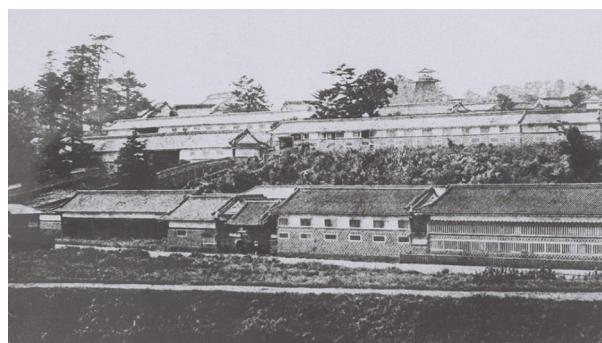


図10 江戸期の市ヶ谷台

左：尾張徳川家藩邸の位置＝「尾張殿」（江戸切絵図）、右：尾張徳川家上屋敷（徳川美術館）

明治新政府は、尾張徳川家からこの地を上地し薩摩藩兵の駐屯地としますが、ほどなく陸軍士官学校が設置されます。この旧陸軍の幹部養成学校で、第二次世界大戦に至る陸軍高級将校の多くが養成されました。1937年に陸軍士官学校が転出すると、陸軍省や参謀本部などが置かれ、陸軍の中枢部となります。



図11 明治期の市ヶ谷台

左：陸軍士官学校の位置（国立公文書館DA）、中右：陸軍士官学校の建物（歴史街道）

「日本のいちばん長い日」（半藤一利）である太平洋戦争の敗戦を経てGHQに接収されると、舞台の風向きは一転します。連合国による極東軍事裁判の法廷が置かれ、戦争指導者を訴追する軍事裁判の場となったのです。この軍事法廷で死刑判決が下されたA級戦犯7名に対する絞首刑は、1948年の明仁親王（現上皇）の誕生日（12月23日）に巣鴨拘置所で執行されました。巣鴨拘置所の跡地が再開発されてできたのが池袋サンシャインシティです。

GHQの接収から返還された後は、陸上自衛隊市谷駐屯地となり東部方面総監部などが置かれました。この間、1970年に起きた「三島事件」をご記憶の方もいらっしゃるのではないかでしょうか（小学生だった関はかすかにTVのニュースの記憶が～）。その事件当時は、旧陸軍士官学校の建物が現存していました。2000年には防衛庁（現防衛省）が赤坂から移転し建物群も一新されましたが、戦争当時の大本営地下壕などは保存されています（「市ヶ谷台ツアー」で見学可能）。高さ220mの総合通信塔が聳える市ヶ谷台は、今日、日本の防衛の中枢となっています。



図12 現在の市ヶ谷台
左：防衛省本省の位置（国土地理院）、
右：防衛省本省全景（防衛省HP）

見学予定地点⑥：荒木町

防衛省前の旧紅葉川の谷から、南側の武蔵野台地に登る坂道の一つ「津の守（かみ）坂」の西側に「荒木町の窪地」があります。この場所は四方を坂に囲まれた見事な「スリバチ」地形で、「東京すり鉢学会」（皆川典久）は、「真性スリバチ」と呼んでいます。もともと自然の営みでできた細くて深い侵食谷の源流部に、江戸時代の有力大名が庭園築造のためにダムを設けたため、四囲を高所が巡るまさにスリバチ状の地形となったものです。スリバチの底には「策（むち）の池」と呼ばれる湧水池が現存し、域外と連絡する車道は一本のみ、あとの大半は階段です。急坂は随所で石畳となっていますが、廃止された都電の敷石を地元の商店会が移設して整備したものです。

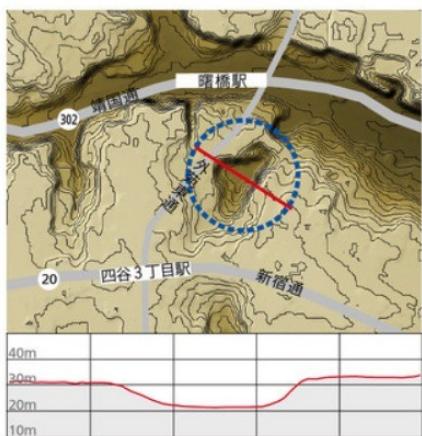


図13 荒木町の地形（左：東京すり鉢学会）と、「窪地」の周囲から降りる階段（右）

荒木町は、明治以降は歓楽街として栄え、入口の神社の石には「三業組合」と刻まれたものも。この「三業」は、窪地や谷筋でよく目にする言葉で、神楽坂西部巡査の音羽谷や、今回の巡査の鮫河橋（さまがばし）谷などでも登場します。三業とは「料理屋」「待合茶屋」「芸者置屋」で、三業が営まれる町域が花街です。荒木町界隈は映画やドラマのロケの名所で、知らずに何度も見ているかもしれません。

知っているとあなたも荒木町ツウ!

**荒木町の特徴を示す
キーワード3**

花柳界(花街)の面影
荒木町の魅力のひとつは、花街の名残ある街並み。少し奥へ足を踏み入れれば、石畳や石段の趣ある小径からかつての風情が偲ばれる。

業界人御用達
昭和・平成半ば頃まで、徒歩圏内にフジテレビや文化放送の本社があり、芸能関係者で連夜盛況だった。いまでも著名人がお忍びで通う店が多数。

ハイクオリティ
花街からの誇りを受け継いた小料理屋や割烹、有名店で修業した料理人によるお店、グルメガイドの常連、ミシュラン星付きのお店などもたくさん。

日中の街ブラならココへ! 名所3

策の池・津の守弁財天
かつては溝が流れる大きな池だった「むちのいけ」。名称は、徳川家康が鷹狩りの際にムチを洗ったという逸話から。脇に祀られているのは芸事の神様。

金丸稻荷
もともと折津上屋敷の守護神として1683年に創建され、1975年には現在の地に鎮座。玉垣には、かつての料亭や土地の名士の名が刻まれている。

**年中企画が目白押し!
主な行事3**

6月 四谷須賀神社例大祭
町々に神酒所が作られ、須賀神社の本神輿、各町会の神輿も町内を練り歩く。街中が江戸の祭りの活気に包まれる。

9月 杉大門通り盆踊り
夕方から夜まで杉大門通りが盆踊り会場に! 生演奏での盆踊りは「盆オドラー」にも大人気。大迫力の和太鼓演奏も。

10月 荒木町秋祭り
荒木町界隈の飲食店を巡る「はしご酒」イベントに合わせ、荒木公園にステージが設けられ、伝統芸能の演奏や芸者衆の踊りが楽しめる。家族で参加できるイベント。

図14 この「津の守坂」の隣の街区が荒木町（左）、今でも元気な荒木町界隈（右：新宿観光振興協会）

見学予定地点⑦: 甲州街道

甲州街道は、江戸幕府により整備された五街道の一つで、江戸城半蔵門・四谷・内藤新宿・八王子・大月・甲府を経て下諏訪宿で中山道と接続しました。巡査では、四谷御門の西側で甲州街道を横切りますが、その重要な特徴を垣間見ることができます。甲州街道には、他の街道にはない特殊かつ重要な目的がありました。それは、江戸幕府危急存亡時の避退路であるということです。甲州街道の江戸城下や近傍には、親藩の藩邸や直参=旗本・御家人の屋敷が数多く配置されています。街道沿いも幕府の天領や譜代の領地で固められています。そういえば、幕末の佐幕派実力集団である新選組の幹部の多くは、八王子界隈の天領の出身でした。万一敵勢に江戸城を脅かされた場合、半蔵門から脱出して甲州街道を西進し甲府城まで一旦退き、そこで体制を立て直して再起を図るという戦略です。甲府は周囲を険しい山々で囲まれた盆地で、天然の要害です。こうした戦略的目的から、江戸幕府は甲州街道の詳細が世に知られないように腐心し、参勤交代での通過藩もたった3藩のみでした。江戸城内濠の最も険しい場所に位置する半蔵門を出て、旗本屋敷が立ち並ぶ番町・麹町を抜け、四谷門から内藤新宿にかけては鉄砲組や弓持組の大縄地が控えます。そのルートは武藏野台地の尾根に沿っており、肉薄する敵に対しては高所から俯角により有利に応戦できます。四谷界隈の町割は偶然ではないのです。

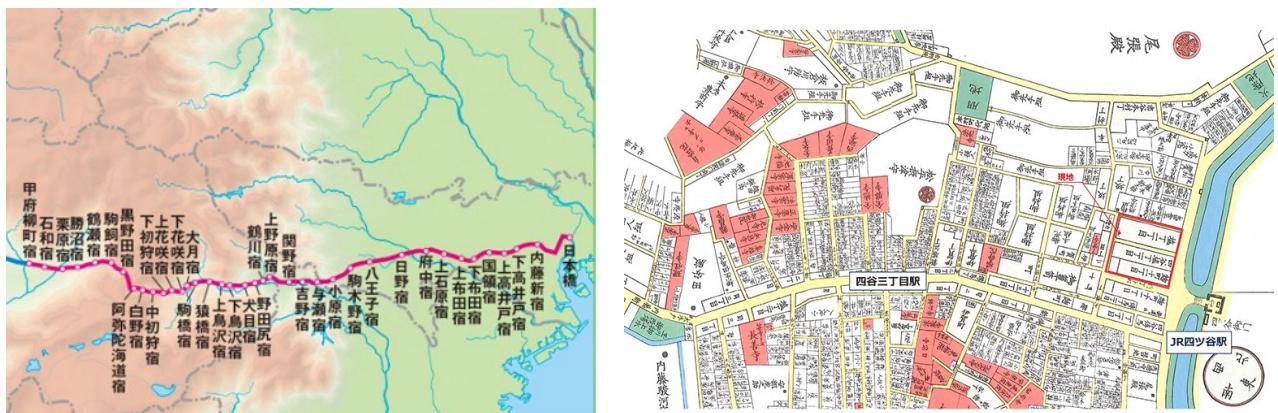


図15 甲州街道・表街道（左：マップル）、現在の四谷三丁目付近の江戸切絵図（右：UR都市機構）

内藤新宿～四谷門～半蔵門にかけての区間で、甲州街道は武藏野台地の尾根を走っています。このことは「将軍の逃避行路」としての優位性に加えて、もうひとつ江戸の町全体の命と生活に関わるある施設の唯一のルートとしての意味をもちます。それは「玉川上水」です。玉川上水は、当時世界最大の巨大都市江戸の飲料水を供給する大動脈でした。多摩川が関東山地から平野部に流れ出してほどない羽村に工夫を凝らした堰を設け、そこ

から延々 42 km でたったの 90 m だけ落ちる勾配=2%の開水路が玉川上水です。江戸城内に水を引き入れるのに最適な地点は、外濠沿いの最高標高の四谷門です。武蔵野台地の西側から、四谷に至る自然勾配つまり自然の下り坂のルートはたった一つで、侵食されずに残っていたのはほぼ奇跡です。四谷界隈では台地の尾根を通る甲州街道が、玉川上水のルートと一致します。甲州街道を横断するときに確かめられます。津の守坂を上って甲州街道に出会ったのち、さらに南進すると道の様子はどのように変わるでしょうか？

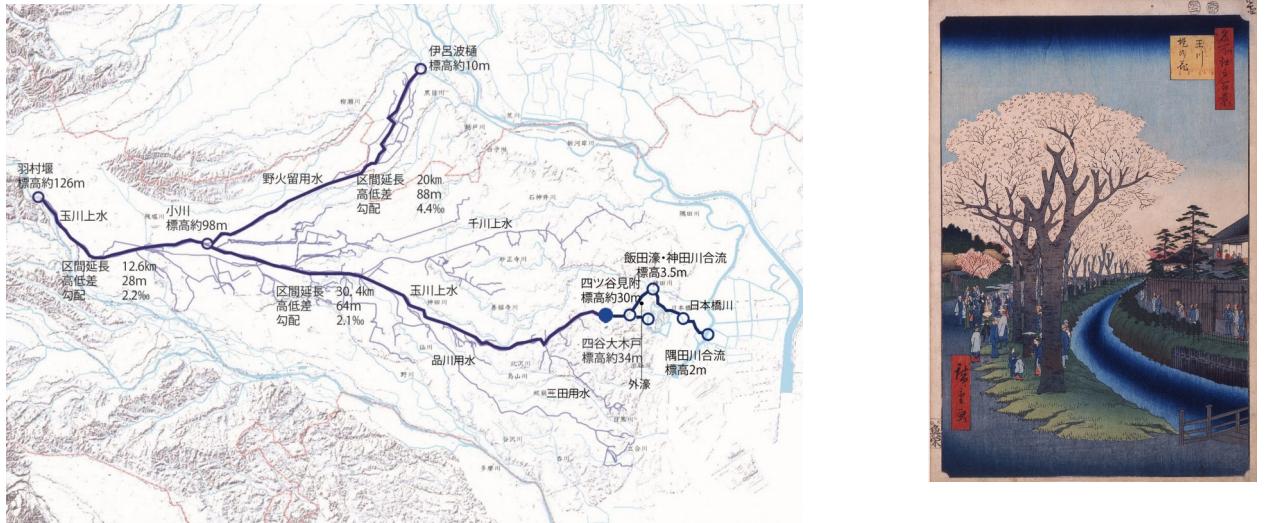


図16 玉川上水全体図（左：水循環都市東京連絡会）、歌川広重による玉川上水（右：江戸東京博物館）

見学予定地点⑧：旧鮫河橋（さめがばし）谷町（旧赤坂川）

旧鮫河橋谷町、現在の新宿区若葉2・3丁目付近も、地形・水理・歴史・土地利用・映画などさまざまな視点から楽しむことができます。

甲州街道の「津の守坂入口」交差点から南進する道は「円通寺坂」で、街道から離れながら高度をさげつつカーブを繰り返すこの通りは、いかにも「川の跡」の雰囲気が大です。1 kmほど南の「南元町」交差点で赤坂御用地に突き当たって終わります。この道は全体として南に向かって下がるとともに、通りの左右は上り坂になっています。つまり通りそのものが一本の谷筋です。この界隈は、町名変更以前には鮫河橋谷町と呼ばれていました。地形的には、赤坂御用地を突っ切って赤坂に向かう「赤坂川」の侵食により造られた谷地形ということになります。

鮫河橋谷は、江戸時代初期には伊賀者の大縄地=集団拝領地でした。江戸の天下太平が続く中で、拝領地主である伊賀者達は、土地を町民に貸し出してその賃料で生活するようになります。一帯は、もともと赤坂川が台地を深く侵食した谷地でしたが、江戸城の外濠造営時などで出てきた掘削土砂で、数mの厚さで埋め立てて人の居住地とたことが、古文書や発掘調査から分かっています。谷地形に起因する低湿な環境により、住民は江戸の都市下層民が中心でした。すぐ上の四谷の台地には満々と水が流れる玉川上水がある一方、鮫河橋谷の住民の飲み水は崖下の湧水に頼っていました。明治維新により拝領地が上地された後も、同様の状態が続き「東京三大貧民窟」の一つとされました。一帯の住民の生活を支えていたとされているのが見学地点⑤にあった「陸軍士官学校」です。若い士官候補生たちが生活困窮者の暮らしにボランティアとして力を貸した、のではありません

（答えは現地で～）。こうしたたいへんな暮らし振りの街だったことを、潇洒なマンションが林立する現在の街並みから想像することはできません。街並みの変化は、関東大震災の前後で起こりました。震災で壊滅的な被害を受けた後、都心近くの一等地として再評価されるようになります。今日に至っています。

この町のすぐ東側には、江戸期には紀州徳川家藩邸が、明治以降は皇室の赤坂御用地が立地しています。鮫河橋谷の出口にあたる南元町公園に隣接して「せきとめ神社」があります。「咳を止める」効用があると信じられていたそうです。この場所には、谷を流れてきた水を一旦堰き止める土堤がありました。生活排水が混じった水からごみを取り除くなどして綺麗にするための池だったようです。水を「堰き止める」と「咳を止める」はシンプルな語呂合わせです。ちなみに上皇様のお住まいの仙洞御所は、この南元町交差点奥の御用地のほど近くです。

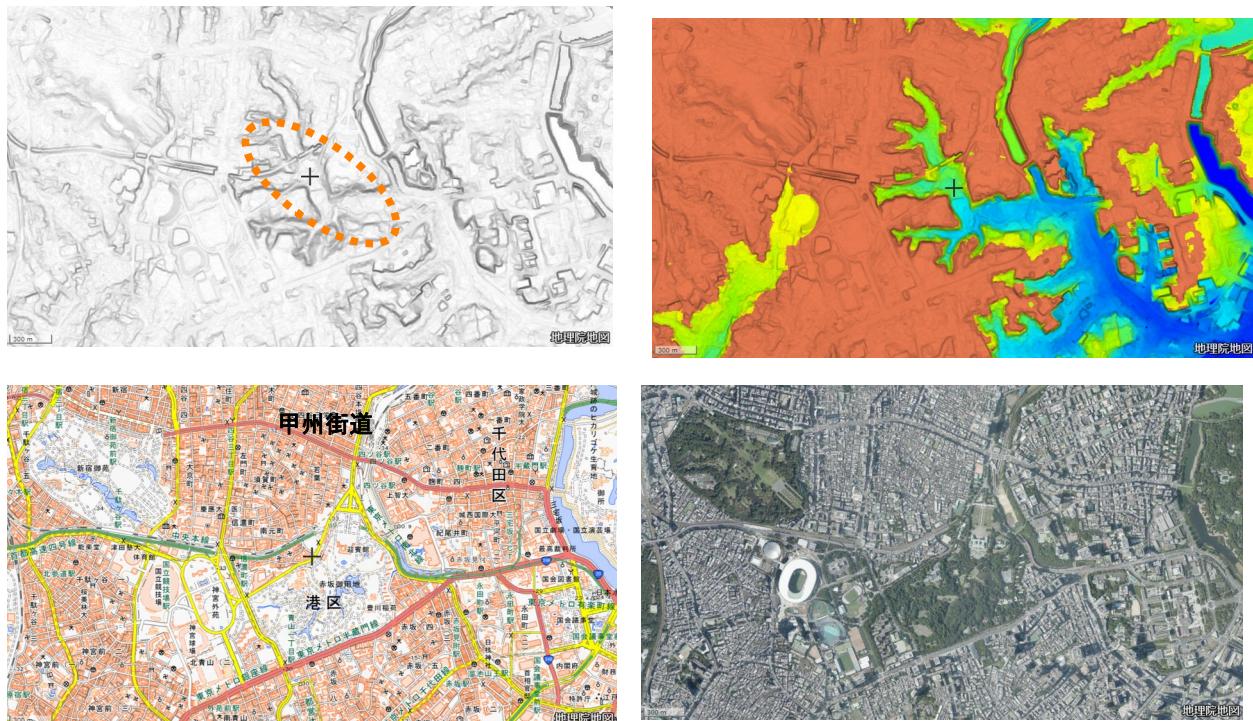


図17 旧鮫河橋谷（○）周辺の様子（4枚の図の範囲はほぼ同じ、全て国土地理院）
上左：傾斜量図（急傾斜地ほど濃色）、上右：色別等高線図（標高5m毎に彩色）
下左：地勢図（上の赤線が甲州街道）、下右：（航空写真、中央の緑地が赤坂御用地）

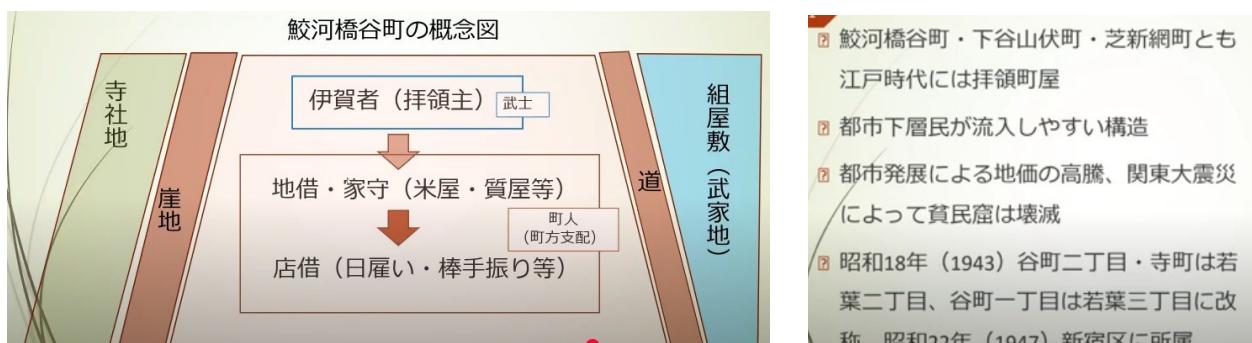


図19 東京四谷總鎮守須賀神社
左：映画「君の名は。」のラストシーン（「君の名は。」製作委員会より引用）、右：須賀神社社殿

この一帯の紹介では、須賀神社を忘れるわけには行きません。「四谷總鎮守」である須賀神社は地域の拠り所であることは勿論ですが、それにしても境内や階段でスマホをかざしている若い人が多いのはなぜなのでしょうか？ 実は須賀神社は、大ヒットしたアニメ映画「君の名は。」（新海誠監督）のラストシーンで主人公の二人が出会う場所なの（だそう）です。もしかすると、今日の巡査コースの中で、最も集客している見学地点かもしれません。

見学予定地点⑨：迎賓館赤坂離宮

迎賓館赤坂離宮は、紀州徳川家藩邸が明治政府に上地された後、東宮御所つまり皇太子殿下の住まいとして建設されました。和洋折衷の洗練された建築は世界唯一であり、国宝に指定されています。現在は国賓の接遇に用いられる迎賓館として使われていますが、一般の来訪者の見学もできます。関も、先日お庭だけですが見学させて頂きました。

迎賓館赤坂離宮は、明治42年に東宮御所として建設された、日本では唯一のネオ・バロック様式による宮殿建築物です。
当時の日本の建築、美術、工芸界の総力を結集した建築物であり、明治期の本格的な近代洋風建築の到達点を示しています。
第2次世界大戦の後、10数年を経て日本が国際社会へ復帰し、外国からの賓客を迎えることが多くなったため、国の迎賓施設へと大規模な改修を施し、和風別館の新設と合わせて昭和49年に現在の迎賓館として新たな歩みを始め、現在に至っています。
その後、平成21年に行われた大規模改修工事の後には、日本の建築を代表するものの一つとして、国宝に指定されました。
これまで多くの国王、大統領、首相などをお迎えしたほか、主要国首脳会議などの国際会議の場としても使用されています。



図20 迎賓館赤坂離宮（内閣府）

迎賓館は赤坂御用地と地続きで、庭園見学で入場すると敷地南側の鬱蒼とした森の御用地の一端を垣間見ることができます。御用地の森との境界はかなり急な崖です。この崖が、見学地点⑧旧鮫河橋谷=旧赤坂川の下流部の北岸（左岸）にあたります。鮫河橋谷の諸事情を思い返しながら迎賓館に隣接する御用地の森眺めてみましょう。甲州街道四谷三丁目交差点付近に降った雨粒が流れ下りながら眺めていくであろう景色の移り変わりなどを想像するようであれば、立派な地形中毒患者と言えましょう。

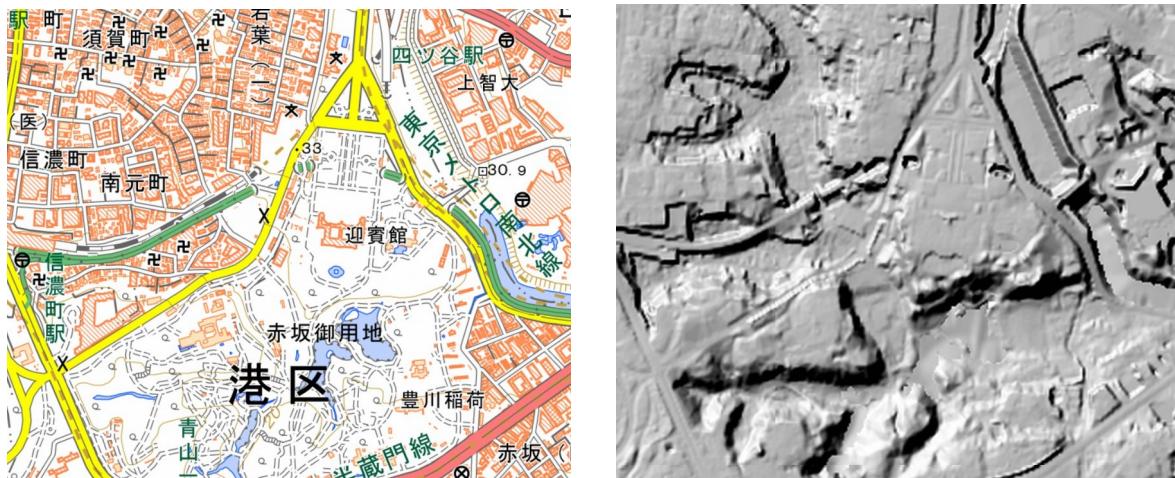


図21 迎賓館と赤坂御用地周辺の地勢（左）と地形（右、いずれも国土地理院）

見学予定地点⑩：四谷見附

いよいよ本日の巡査の最終見学地点である四谷見附です。御門自体は明治期にそのほとんどが撤去されてしまいましたが、江戸城の数ある御門の中でも四谷御門はかなりの「大物」でした。まず交通量が最大級で、江戸城内への物資需給の大動脈でした。また、見学地点⑦甲州街道で触れたように、巨大都市江戸の命の水の大動脈である玉川上水を城内に導いていた場所も四谷御門です。江戸城外濠沿いの最高地点に位置する四谷濠は、機械力のないフル人力で、幅約 100 m・深さ 20 m 近い溝の化け物を造ることで完成されました。掘削土量でもお茶の水の神田川と並んで江戸城造営工事の中で最大級でした。見学地点⑦甲州街道で見たように、将軍危急時の避難ルートなので万一にも敵勢の進入を許せません。そのため外濠に架かる橋の前後で道路は鍵の手になっていました。「土橋」では敵の追撃を遮断できませんから、あえて本当の橋を掛けていました。危急時には簡単に破却できるからです。こうした江戸期の四谷見附界隈の様子を想い描きながら、現在の賑やかな同地に残る痕跡を観察してみましょう。



図 22 四谷見附界隈の要チェックポイント

左上：四谷御門（新宿区歴史博物館）、上中央・右：四ツ谷駅改札口脇の御門の礎石
中左：JR総武線赤坂トンネルのうちの赤レンガ製のものは明治期の造営、中中央：迎賓館入り口付近の開口部からは地下を通る首都高が、中右：四谷見附橋の銘板は明治末期に掛けられた旧橋から移設されたもの、下左：外濠の水質浄化事業計画では現在は放置されている玉川上水の東側区間を復活通水させる（東京都）、下右：玉川上水の重厚な石構が近くの清水谷公園に展示されており四谷以東の地下上水道の様子を窺える

以上